【温泉街別府】（四）「駅前に立つ銅像に！？」

別府市の玄関駅である JR 日豊線別府駅東口を出ると、すぐに何ともユニークな銅像が目に付く。いかめしい銅像姿ではなく、「なに！これ？」といった感じのモニュメントで、初めて見る人にはその意味が分からない。かくいう筆者も別府に移り住んでから初めて見た瞬間、「何だろう？」と思った一人である。

別府駅前に立つ油屋熊八像

像の主は、油家熊八という人物で、別府市だけではなく大分県では有名人。何しろ、今日の別府温泉を日本どころか世界にまで広げた人物なのだから。

熊八は、1863 年（江戸時代末期）に伊予宇和島（現在の愛媛県宇和島市）で生まれ、大阪に渡り米相場で富を築いたが、日清戦争後（1895 年）には失敗して全財産を失ってしまう。その後、渡米するなど紆余曲折の末に妻が身を寄せていた別府に移住し、再起を図るのだが、その事業主体となったのが温泉だった。その頃の別府は、1870 年代（明治時代）の文明開化とともに別府港が開港し、温泉をメインとした街づくりが進められていた。熊八は、大正時代（1912～1926 年）からその温泉街としての別府をさらに発展させて、現在の国際観光都市別府の礎を築いた人物で、別府にとってはいわば恩人中の恩人。

熊八が創業した亀の井旅館は、法人が変わって今も亀の井ホテルとして健在だ

熊八は、別府温泉を日本全国に知れ渡らせるため、「山は富士、海は瀬戸内、湯は別府」というキャッチフレーズを考案。1926 年（昭和元年）に富士山山頂付近に標柱を建てて、別府温泉を宣伝した。標柱は全国各地に建てられ、しかも福岡や大阪、東京といった大都市の空き地には、予定がないにも関わらず「別府温泉　亀の井ホテル建設予定地」の立て看板を設置して別府温泉を宣伝した。宣伝活動のあの手この手はまだまだあり、翌 1927 年には大阪毎日新聞が主催した「日本新八景」の選定の際には、別府市民に投票用の葉書を配り、組織的に投票を行った結果、別府を首位に導いて、別府温泉の名をさらに広めたのである。　熊八の宣伝活動のおかげで、別府温泉は一躍全国に知れ渡るようになり、日本を代表する温泉地として発展したのだが、宣伝だけに止まらず逸話はまだある。例えば、バス旅行には付き物のバスガイド。日本最初のバスガイドは男性だったのはご存知だろうか。1925 年 12 月に東京乗合自動車（現・東京都営バス）で、遊覧自動車にバスガイドを採用したのが最初だが、男性では人件費が高くてすぐに消え去ってしまった。そして現在の女性バスガイドは、熊八が亀の井遊覧自動車（現・亀の井バス）を興して、別府の「地獄巡り遊覧バス」を運行した際に女性のバスガイドを採用したのが始まりとなる。当時、独特の観光案内が人気となったそうで、今も走る「地獄巡り遊覧バス」に乗ると、若い女性ガイドの口から「ここは名高き流川、情けも厚き湯の街の、メインストリートの繁華街…」と流れる。

亀の井自動車は現在、亀の井バスとして市内を走っている。もちろん熊八が始めた「地獄めぐり」の遊覧バスも定期的に運行されている

まだある。別府から西へ車で１時間ほど走ると、別府温泉と並んで人気の温泉地「由布院」に着く。由布岳の麓の静かな温泉地由布院は、熊八が内外からの著名人を接待する別荘（現・亀の井別荘）を建てて、「別府の奥座敷」として開発したのが始まりで、今では外国人観光客にも人気スポットとして定着している。

熊八は、1935 年（昭和 10 年）に亡くなるのだが、それまで別府温泉を全国に広めるために私財を投じたため、最後には全財産を使い果たし、創業した亀の井旅館（現・別府亀の井ホテル）や亀の井自動車などの資産は借金返済のため売り払われてしまった。しかし、その偉業は長く称えられ、「別府観光の父」として 2007 年に、別府駅前にこのブロンズ像が建てられたのである。

2019 年のラグビーW 杯で桜のジャージーに着替えた熊八像。クリスマスにはサンタ姿にも変身する。

熊八の像は片足で立ち、両手を大空に向けて広げている姿で、普段は背広の上に温泉マーク入りのマントをまとっている。よく見ると、そのマントの端には何か子供みたいな像がしがみついているが、これがなんと小鬼で、観光スポットの地獄めぐりの鬼の子供。制作者によると、天国から舞い降りた熊八が「やあ！」と呼び掛けているイメージだとかで、何とも銅像らしからぬ銅像に、見上げた当方が「！？」となる。

文/図： 鈴木源柱